



第39号



ECOMAIL

### 関西 ECOMAIL

関西支部会員のみなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員のみなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座

00990-5-37886)

## 第60回 ワークショップのお知らせ

シンポジウム「よみがえれ! フェニックス土居川」への参加を  
ワークショップと致します。

日時: 1997年7月26日(土) PM1:30~4:30

場所: リーガロイヤルホテル堺

講演: 藤本義一氏

パネリスト: (パネリスト) 小田 一紀氏(大阪大学) 木津川 計氏(立命館大学)

田丸 静子氏(神戸市の「新製川をきれいにする会」代表) 広松 伝氏(元御市町立環境浄化係長)

参加費: 500円(資料代を含む)

主催: シンポジウム「よみがえれ! フェニックス土居川」実行委員会 ☎(0722)21-0016

企画: 土居川・内川周辺市内散策

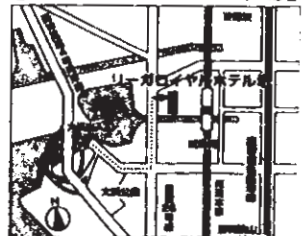
ガイドは、考古学者・宮川渉氏及「観光ボランティア」の方です。

☆集合午前10時 ☆南海堺東駅 南口改札前

## 第39号 目次

- ・連載企画<阪神・淡路発! 被災地は今> (最終回)  
「震災と環境-人生観と世界観の変革-」(要約)  
(谷口文章) ... 2~3
- ・「近頃思うこと」(鈴木善次) ... 4
- ・《新》連載企画: 開催迫るCOP3京都会議  
「京都温暖化防止会議(COP3)  
と市民的対応-その1-」(井上有一) ... 5
- ・共催ワークショップ「すいた環境教育フェア '97」  
(第59回関西ワークショップ) (赤尾整志) ... 6
- ・ネットワーク ... 7~8

【シンポジウム会場】



## 「震災と環境—人生観と世界観の変革—」

(要約)

谷口文章 (甲南大学)

### 1 はじめに

どれほどの／いとしい人を／裂いたのか／  
地の神の怒り／まだ鎮まらず

(神戸市 Nさん)

まったく予想できなかった阪神淡路大震災は、人々の心に大きな打撃を与えた。それは、安心して生きている日常生活の環境を根底から覆し、「いとしい人」との別れをもたらすものであった。それはまた、ある意味で現代人の傲慢さに対しての「地の神」である大自然の怒りでもあった。地の神の怒りは、果たして「鎮まった」であろうか。

ところで、このような大震災は人々の人生観と世界観に深刻な影響を与えた。また、震災体験は現代人に人間の傲慢さを気づかせ、本来の自己に目覚めることによって人生や世界についての価値観の変革を迫り、環境に対する見方についても反省を促した。そして、震災を通じて理解できたことは、人生観を形成する「心の構造」と世界観が基づく「自然の構造」は同じ様な円環的性質をもつものであり、両者は「“今、ここ”の環境」という場に成立するということである。

震災という不幸が契機になっているとはいえ、このような体験と自覚を、長い人生の上で大なり小なりの苦難と重なり合わせて積極的な生きる姿勢へと転換できないであろうか。「震災と環境」について考察することで、人生観と世界観の積極的な変革の試みを、人生一般の立場から考えてみよう。

●被災した人々の人生観や世界観は「今、ここ」の環境」という場に傾ざしている。それは、それまでの日常生活が営まれてきた場であり、人生を過ごしてきた場である。それが震災によって崩壊し、その場が「当たり前」から「有り難い」へと意識変化が起こることになる。

### 2 人生観と世界観に与えた震災の影響—阪神淡路大震災を通じて—

天と地と／逆さになりし／心地して／  
われに返るも／こころ還らず

(神戸市 Tさん)

阪神淡路大震災のような予期せぬ環境の大破壊は、生活の場である“今、ここ”という環境基盤を“天と地を逆さ”にして破壊させる「世界没落体験」であった。それは一方において、当たり前だと思っていた人間の生き方(人生観)と生きている世界についての捉え方(世界観)について厳しく問いただすものであり、他方において人生観と世界観が成立する場である“今、ここ”の環境についての見方を変更することを徹底的に促すものであった。

そのような体験は論理的にいうと、人生観においては、時間軸における没落体験であり“今”の否定である。世界観においては、空間軸における没落体験であり、まさに“ここ”の否定である。それを回復し新たな視点をつくり上げるために、両者が成立する「場」としての“今、ここ”の環境についての新たな見方が要求されることになった。

●被災による、日常生活の場としての“今、ここ”の否定は、心の傷を伴って、その人の自然観や世界観に大きな変化をもたらすことになる。本論ではこうした自然観や世界観の変化について、次のように説明されている。

このような内的世界の心の傷を癒すためには、心充ちたポジティブな“永遠の今”である円環的時間と外から守られた

円環的空間が必要であり、その両者の条件が整ったとき、“今、ここ”において自然治癒力が動きだす。それは、心の内なる自然が動けば、外なる大自然の時間のリズムをとりもどすことができるからである。(中略)このような治癒体験、そして“今”の深まりは、その人に人生観の変化をもたらすであろう。

(中略)

その意味で、世界を見る視点が、今までの“ここ”がかった“あそこ”へと震災によって強制的に移動させられ観点が変化したことを表わす。その新たな観点から世界がちがって見えるのは必然であり、その観点から新たな世界を意味づけ構築する変革に迫られている。

●これら、自然観・世界観の変化における、「価値観が無理やりに変更されることによる痛みは、当事者でないと分からないもの」であるが、「新たに意味づけ構築する」ために、変革へと性質を変えていかなければならない。それによって、「見方を変えればそれ(自然観・世界観の変化)は、新たなものを生み出す障害であると同時に、創造の喜びにもなることも忘れてはならない。それに気づけば、人生観と世界観の“変化”は“変革”となって、人生をより充実したものにすることができる」のである。

しかしながら、震災によって傷ついた心は「変革」の方へと自力で方向転換することは容易ではない。そこには、外的であれ、内的であれなにがしかのケアが必要となってくる。

例えば、震災体験などによる心の深い傷は、PTSD(心的外傷後ストレス障害)に陥る可能性も孕んでいる。そのような症状は、「心の構造」が円環的であるため、災害の衝撃によって“空白”になったとき意識下に抑圧されたショックによる“心の傷”が本来のリズムとはちがった形で意識に上ろうとする運動によって生じる現象である。

心の“ケア”が必要なのは、このようなときである。つまり、正面から困難に立ち向かう時間もなかった、また自分の責任とは関わりなく生じた天災に対する行き場のない怒り。新たな現実に対する対処などの心理問題に対して、心のケアが必要とされる。その体験の意味づけができず、長期にわたって生活上に障害が生じる場合PTSDとなる。

(中略)

したがって意識的自我と本来的自己との和解のために、また、“現とも夢とも区別つかぬまま”さ迷い歩くほどの心的外傷を受けた人のために、空白時の抑圧した体験をその時点に逆上ってくり返し「物語る」(トークスルー)癒しの時間が必要である。それは「やり残しの仕事」をおこなうことである。こうして、被災体験などをくり返し語ることによって、感情のカタルシスとその体験の意味づけができる。物語ることのできなかつた人、また十分に悲しみを再体験できなかつた人は、その体験の意味づけができずにPTSDなどの深い傷となって心に残ることもある。

●次に、「3 人生観を形づくる『心の構造』の円環性」「4 世界観が基づく『自然の環境』の円環性」の中で、谷口氏は震災を体験した人々の心の状態を、人生観を形成する「心の構造」と世界観が基づく「自然の構造」に分け、それを「“今、ここ”の環境」という場に成立する事象として考える。さらに、前者を時間性としての“今”として、後者を空間性としての“ここ”として捉え、両者の直線的・円環的な構造の特徴を考察している。また、これらの分析の結果として意識変化がいかにして「変革」となりうるかを「5 人生観と世界観の変革と環境に対する見方の変化(1) 人生観と世界観の変革」の中で次のように述べている。

物欲が／なくなり物の／価値観が／  
ガラリと変わる／大地震のあと

(神戸市 Aさん)

阪神淡路大震災の場合、内的側面において人間があまりにも傲慢であり、外的側面において大自然の前ではいかに無力

なものであるかを知らしめた。この意味で、人間の自己中心的な自我の観点からのみ考えるのではなく、けっして自然は優しいだけではなく、恐ろしくて厳しいものであることを自覚するべきであろう。そして震災は、日常の様子家である“今、ここ”の環境の安全がいかに「有り難い（有ることが難しい）」ことであるかを気づかせ、だからこそ「感謝」の気持ちが必要であることを痛烈に自覚せしめた。

まず、人生観が、このような極限状態において“物の価値観がガラリと変わる”ことは言うまでもない。それだけでなく、日常生活の多忙さに埋没していた「本来の自己」との対話が始まり、今までの人生の在り方が問われることになった。ここに人生観の変化が“変革”へと導かれる契機がある。

また、存在の拠り所であった自分という意識である「自我」の崩壊を余儀なくされることで、自我心から生じる“物欲”から開放されている「あるがままの自分＝自己」を発見したのである。そのとき生死に直面している人々を助ける自分、本来の人間らしい優しさがあふれ出している自分を新たに発見したのである。

(中略)

しかしそれにしても、被災当事者には、PTSDなどの障害が上述のように現れる場合と、愛する者を失った場合とがあり、それぞれの人生観の変革はちがったものになるであろう。

(略) 前者の場合、心の傷の癒しは個人の問題に重点が置かれるが、後者の場合は生き残った罪の意識に苛まれることがあり、癒しのためには前者とは違った感情の整理と人生の意味づけが必要とされよう。

いずれであっても、新しく人生の意味づけができたときには、人生観の変革が可能となるといえよう。

●次に、震災体験がケアされるのと同時に、それがいかにして環境教育と結びつけてくるのかを、人間の新たな出発点、つまり「新しい生き方と、新たな環境を見る眼の原点」として考察し、「5(2)環境に対する見方の変化」の中で次のように述べている。

#### 動かざる／大地が闇に／吾を襲う／ 震え激しき／凶器となりて

(向日市 Oさん)

人生観と世界観の変革を通じて、「環境の見方」が変化したと考えられる。21世紀に向けて、地球環境問題が取り沙汰されているが、このような変革を通じてより多様な環境の見方が期待される。

ところで環境についての見方の変化は、人間と環境との在り方へと、つまり人間がどのように自然を見るか、自然とのつき合い方をどのようにすべきかという原点へと人間を引き戻す。そして、人間も自然も、すべての生命も「輪となり共生(和)している」ことを身体でもって知ることにつながるのである。

今までみてきたように、人生観や世界観という価値は、“動かざる大地”が揺れる大地震によって一挙に変化した、ある意味で、それは人々が自我心から離れ「無」になったことでもある。死の恐怖を伴う大地震の体験によって、時間の経過とともに個人において心が癒される一方、世界において人間の新たな生の出発点に立つ機会を得たともいえよう。これはまさに人生と世界についての「価値観の転換」である。つまり、人は自我意識をも“動かざる大地”と考えていた。しかしそれは安定してはいるが固定し硬化していた自我であった。そのような自我が“震え激しき”揺れを経験して、垂直面において無意識の底に潜む本来の自己との対話を始めること人生観の変革を果たす契機とすることができるのであ

る。他方、世界観の変革については、地震が“凶器”となって強制する否応なしの変化であったにせよ、人間を取り巻く家庭、社会、自然という水平面の環境について今までとはちがった世界を築き上げる目標ができたともいえよう。

ここに、新しい生き方と、新たな環境を見る眼の原点が見いだされるように思える。その意味で新たな“今、ここ”の環境づくりをもう一度始めなければならないであろう。

●最後に「6 まとめ」の中で、次のような小学生の作文を手がかりにして、人間の在り方、教育の在るべき姿が導き出されている。

次の小学生の作文を見てみよう。

「私はテレビで見たんだけど、インタビューすると、にっこりわらって話してました。でも、本当は、すごくななくて、こわいんだと思うんです。神戸市のみんながかなしくてこわかったんです。家族をなくしたり、友人やいとこをなくしたり、家やざいさん、自分の人生をなくしてしまった人がたくさん、神戸市にいます。ガスや水道がふっきゅうしてないと、料理もできない、トイレもできないんです。私のしょう来のゆめは、お医者さんになって、病気の人々をなおしてあげるんです。でも、けんちく家にもなりたいです。みんなのお家を作って、みんなでもう一回ステキな神戸市を作りあげるので。そして、私が一番直したいのは、人の心のきずです。五千人以上の人が死んだら、心にはきずをかかえている人も、きっと多いはず。そして私はそのきずをいつかなおすんです。」(K小学校Aちゃん「心のきずをなおしたい」より)

本稿の結論は、この被災を体験した小学生の作文に集約される。“ここ”の崩壊については地震の恐ろしさ、また“今”の崩壊については他人には分かってもらえない本当の自分、本来の姿が見せられない人間の哀しさ、その本音などによって示されている。しかしそれにもかかわらず、“人生観や世界観の変革”については、“心のきずをなおす”医者や“地震に強い家”をつくる建築家になる夢などに示されている。

“環境の見方”に関しては、この作文から「環境教育」の考え方の基本が想起される。その教育は暖かく優しい思いやりがあり、創造力豊かな子どもを教育することである。つまり、環境教育の原点は、生命の温かさ脆さ、生と死、傲慢と謙虚さなどを教え、環境に対する見方を新たなものにすることである。この作文の小学生は、ある意味で震災体験によって人間と環境との関係の本質を端的に体験したともいえる。

また、震災によって今まで当たり前であったことが「有り難い」と感じたという、子どもたちの心境(=心的環境)の変革をわたしたち大人も学ばなければならないであろう。

●以上、谷口氏の論文を要約という形で掲載させていただきました。紙面の都合上、要約して掲載せざるを得なかった訳ですが、それによって大部分が抜け落ちてしまう形になってしまいました。もし、こうした問題についてご興味をお持ちの方は、是非とも全文をお読み下さるようお願いいたします(本論文は、菅谷守一 編『阪神大震災・心の風景-阪神大震災の記録5-』(甲南大学阪神大震災調査委員会、1997、pp.166-174)に掲載されています)。また、最後にになりましたが、関西エコーメールに掲載するために快く論文をご提供下さいました、甲南大学文学部教授の谷口 文彦 氏に心から謝意を申し上げます。(文責：天野、エコーメール広報委員)

1997年7月13日

## 1. COP3とCUP3

今年の4月、京都の栗田小学校で環境教育についての講演を依頼され、研究室の学生たちとともにその地を訪れた。京都では今年の12月に気候変動枠組み条約の締約国による国際会議、いわゆるCOP3 (Conference of the Parties) が開かれることになっているので、話の種に三種類のコップ (紙コップ、プラスチックのコップ、ガラスのコップ) を持参した。ご承知のようにCOP3は地球の温暖化を防止するために、加盟国がそれぞれ温室効果ガス (主として二酸化炭素) の大気中への排出をどれだけ抑えるか、その削減値を取り決めるための会議である。1回目がベルリンで、2回目がジュネーブで、それぞれ開かれ協議されたが、コンセンサスが得られなかった。今回こそ成功してほしい。もちろん、政府に頼むという受け身の態度であってはならない。地球温暖化を防ぐために自分たちでできることはなにか。そのことを検討しあい、その実現に向けて努力することが今求められているのである。例えば、ジュースやビールを飲むとき、僕が持参した三種類のコップのうち、どのコップを使うのが地球温暖化防止にとって望ましいだろうか。講演会に集まられた人々にもそのことを考えていただこうと思ったが、駄洒落は通じなかったようである。でも、日常生活とCOP3とを結びつけて考えることが必要であり、「エコメール」の読者にも是非検討していただきたいものである。

## 2. 中学生の「事件」と環境教育

毎日のように報道されている神戸の「事件」。原因分析やら今後の事件防止対策などがさまざまな立場の人によって語られている。僕もいろいろな角度から考えてみたが、環境教育に携わるものとして検討してみる必要があるのではないかと思った。環境教育の目標には自分を取り巻く環境や環境問題への「気づき」「理解」「行動力」などが掲げられているが、僕はその根本理念として自分たちの生き方、大きくは文明のあり方を問い直す力を育てることであると主張してきている。しかし、その「生き方」は決して自己中心的なものでなく、他の人々、さらには他の生き物と「共に生きる」という気持ちが含まれるべきものである。自分にとっての環境さえよければ、他者の環境はどうでもよい。そうした他者への配慮を欠いた気持ちや行為がいろいろな環境問題を生じさせているのである。環境教育の果たす役割はそうした状況の改善である。ここで他者を個人のレベルで捉えれば、環境教育は人権教育にも繋がるし、人種や民族、国民というレベルで考えれば国際理解教育、異文化理解教育、あるいは開発教育とも結びつけられる。このようにひろく考えると、今回の「事件」と環境教育との接点も見えてくる。今、各学校で環境教育の必要性が認識されはじめ、さまざまな試みが始まったが、上に示した環境教育の目標を表面的に受け止めるのではなく、その根本にある思想、特に共生の思想、を再確認され、そのことを子どもたちが自ら考えることができるようなカリキュラムなり、教材なりを作り実践にあたることが望まれる。そうした「本物の」環境教育が学校で展開されたなら、今回のような「事件」の防止に一步近づくのではないだろうか。みなさんのご意見をお聞き出来れば幸いである。

## 京都温暖化防止会議（COP3）と市民的対応 -その1-

井上有一（奈良産業大学）

### 1. 気候変動問題が問いかけるもの

この12月京都で国連気候変動枠組み条約第3回締約国会議が開催される。政府、国際機関、報道、NGOなどの関係者が数千人参加すると見られ、日本では最大級の環境関連会議になる。京都気候サミット、京都温暖化防止会議、あるいはCOP3など、さまざまな名称で呼ばれるこの会議の重要性は言を俟たない。この会議には、議定書の採択がかかっているからである。1992年に成立した国連気候変動枠組み条約には、特に西暦2000年以降について、気候変動（地球温暖化）を引き起こすいわゆる温室効果ガス（二酸化炭素やメタン、亜酸化窒素やフロン仲間）の人為的排出をどれだけ、いつまでに削減していくかの義務をはじめとし、気候変動に対応していく上での具体的取り決めが盛り込まれていない。この法的拘束力を持つ削減数量目標など具体的取り決めを行うものが、まさに京都議定書にほかならない。今日、最大の地球環境問題と呼ぶにふさわしい気候変動問題に対し人類が決定的な一歩を踏み出せるのかどうか、COP3の意義はまさにこの一点に集約される。

この「決定的な一歩」はしかし文明史的な転換の始まりという重みを持つ一歩になる。それは、石油や石炭といった化石燃料への全面依存からの脱却を意味するからである。これはまた、「大きいことはいいことだ」という経済成長優先主義との決別でもある。産業革命以降、主として化石燃料の燃焼と森林破壊という人為的原因により、大気中の二酸化炭素濃度は280ppmvから360ppmvまで増加してきた。世界第一線の専門家を集め、条約交渉の科学的根拠を提供しているIPCC（気候変動政府間パネル）は、その第1次報告（1990年）で二酸化炭素の大気中濃度を90年のレベルに安定化させるだけでも即座に排出量を60-80%削減しなければならないと述べ、また第2次報告（1995年）は人為的な原因による地球温暖化はすでに現実のものになっていることを認め、世界に衝撃を与えた。安定化のために必要とされる削減幅が、技術的対応により中短期的に視野に入る10-20%ではなく、消費の絶対量の大幅削減、すなわち社会の基本的構造や私たちの従来の考え方や価値の変革を必要とするスケールに達していることに注目したい。

気候変動問題の問いかけはこのような環境持続性の問題に留まらない。これは優れて現代世界の社会的公正を問う問題でもある。IPCC第2次報告によると、化石燃料燃焼による二酸化炭素排出量は、世界平均一人当たり（炭素換算、1990年）約1.1トン、付属書I締約国（北の諸国）での平均で約2.8トン、それ以外の国々（南の国々、「発展途上国」）での平均で0.5トンとなっている。（国により、50倍以上の格差がある。なお、オクリッジ国立研究所の数字（1991年の推計値）によると、米国5.33トン、カナダ4.15トン、旧ソ連邦3.36トン、ドイツ3.31トン、日本2.40トン、韓国1.65トン、中国0.60トン、インド0.22トン、世界平均1.15トンなどとなっている。）一人当たりの二酸化炭素排出量の南北格差はこのようにきわめて大きい。また、気候変動の進行に伴い、より大きな被害を受けるのは、これら南の市民にほかならない。海面上昇により、また風水害の激化により、さらに食料生産の不調により、まっさきに生命の危険にさらされるのは、日本の市民ではない、バングラデシュのような国々に住む南の市民なのである。

このように気候変動問題は、環境教育が依拠すべきと考えられる二つの原理、環境持続性の保持と社会的公正の確保のいずれも、本質的なかたちでまた明示的に侵害するきわめて挑戦的な問題なのである。（次号につづく）

## ◆すいた環境教育フェア'97 (共催ワークショップー第59回)

### —— '97 環境月間の活動 ——

6月の環境月間にちなんで地方自治体がする環境保全啓発行事に、今年も日本環境教育学会関西支部が支援活動を行った。昨年につづいて今年も6月14日に開催された「すいた環境教育フェア'97みんなで考えよう『環境ってな〜に』」のプログラムのひとつを担当した。内容は、分科会「生きものと共生するまちづくりービオトープってな〜に」をテーマに、本学会支部会員の辰見武宏さん(神戸市立御影小学校教諭)が地域に立脚した学校ビオトープづくりについて、ビデオ映写による実践報告をした。また、地元行政の立場から、稲田智彦さん(吹田市生活環境部緑化公園事務所緑化推進課長)が吹田市の公園事情について話した。そのあと、参加者からの質問や意見によって吹田市の共生まちづくりについて話し合い、さいごに阪神・都市ビオトープフォーラム実行委員会実行委員の前田誠一郎さん(尼崎市美化環境局)に、「美しい自然の風景をつくるのが豊かな生きものの住処をつくることにつながるという“ビオトープ”の原点を大切に、トンボの池だけをつくるのがビオトープだとはき連えないように」と、奥須磨公園トンボを育てる会会長石井さんの「トンボは福祉や」(きれいな空気、豊かなみどりがないと実現しない)という言葉を用いてまとめをもらった。

昨年は同フェアのメインプログラムのひとつとして、本学会関西支部会員が協力して3つの分科会で環境問題を討論して盛況であったが、今年は同じ時間帯に6つのプログラムが当てられたため(企画のまずさ)、分科会の参加者は数、関心ともに期待外れとなり、正直に言って十分な市民参加型の学習成果を上げることができなかったのが残念である。環境行政の中での環境教育の限界を感ずるとともに、例年環境月間にどこでもよく行われる集中繪花方式の1日イベントの見直しが必要のように思われた。(文責 赤尾)

## ◆エコライフ・フェスティバル'97

(泉大津、テクスピア) 6月14日

大阪府、泉大津市共催の上記行事にせいわエコクラブ(サポーター原田智代さん)とネットワークEEinおおつ(代表 植田)が企画側として参加。関西支部として実質協力しました。EEは非木材パルプ ケナフを用いた紙すきを実演。約100名ほどの参加者がケナフはがきを自作して持って帰りました。

午後は「環境家計簿シンポジウム」ということで鳥取大学の城戸由能氏の基調講演のあと、市民、行政、EEの植田など5名のパネリストを交えてパネルディスカッションを行いました。環境家計簿の意義など活発な討論となりましたが、フロアーからの意見がほとんど無かったのが残念でした。

## 銀河・農林小学校 [年中生徒募集中]

—いきいき、わくわく野菜作り！みんなで楽しく野外活動！！—

- 活動コース
- A 野菜作りの部（創造コース）
  - B 開拓・開墾の部（復元コース）
  - C 野外活動の部（発見コース）

学期・日時 3月（入学式）～12月（終了式）  
毎週 水曜日（3～5時）または土曜日（2～4時）

対象 3才児（保護者同伴）から高齢者までどなたでも（現在15名の皆さんが活動中）

校舎・校庭 お借りしている近くの里山（小川、田畑、社寺林）

学費 入学金4000円（保険料）実費その都度納入（種代など）

申し込み、問い合わせ 京都府相楽郡加茂町南加茂台4-15-10

（☎、FAX）0774-76-5739（片山泰造）

ネットワーク

### ■水辺の鳥の観察会（第1回）

- 日時 7月26日（土）17:00～19:30
- 場所 堺市大津池
- 内容 大津池には島やヨシ原があって、島ではゴイサギやコサギ、アオサギといったサギ類が繁殖しており、ヨシ原には大阪でも有数のツバメの集団ねぐらができます。
- 参加費 無料
- 定員 40名、小学生以上
- 申込法 往復ハガキに「水辺の鳥の観察会」参加希望と明記のうえ、希望者全員の住所、氏名、年齢、電話番号と返信用の宛名を書いて申し込み下さい。（7月12日締切）
- 問い合わせ 大阪市立自然史博物館  
大阪市東住吉区長居公園  
1-23 TEL.06-697-6221

### ■第11回有機農業ワークキャンプ

- 日時 7月31日（木）14:00～8月3日（日）14:00 3泊4日
- 場所 兵庫県水上郡 橋本農園他
- 参加費 16,000円
- 定員 12名
- 内容 農業体験・環境学習等
- 申込法 申し込み用紙をご請求のうえ、必要事項を記入してFAXか郵送で申し込み下さい。
- 問い合わせ 神戸市灘区山田町3-1-1  
（財）神戸学生青年センター  
TEL.078-851-2760  
FAX.078-821-5878

### ■日本野鳥の会大阪支部探鳥会

- 日時 7月19日（土）9:00～
  - 場所 鶴見緑地
  - 集合場所 地下鉄鶴見緑地駅改札口前
  - 担当 旭 TEL.0722-52-1025
  - 日時 7月20日（日）9:00～
  - 場所 淀川
  - 集合場所 地下鉄谷町線・堺筋線  
天神橋6丁目駅 北側改札口前
  - 担当 橋本 TEL.06-352-0302
  - 日時 7月27日（日）9:00～
  - 場所 南港野鳥園
  - 集合場所 ニュートラム中ふ頭駅前
  - 担当 広田 TEL.0722-23-7419
  - 日時 7月27日（日）9:00～
  - 場所 大阪城公園
  - 集合場所 JR環状線大阪城公園駅
  - 担当 吉村 TEL.06-461-8615
- ※ご参加の際は、各担当の方に電話で確認のうえ、申し込み下さい。参加費はいずれも無料。
- ### ■セミの羽化をみよう
- 日時 7月29日（火）18:00～20:30
  - 場所 江坂カーニバルプラザ内
  - 内容 大きな木にたくさんセミが羽化している様子を小室さんの案内で観察します。
  - 参加費 大人300円 小人200円  
一家族500円
  - 定員 40名
  - 申込法 当日受付
  - 問い合わせ 吹田自然観察会  
TEL.06-833-6988

ねつとわーく

## E-mailサービスを試行（事業部）

### COP3 関連会議に参加される方へのお願い

関西支部事業部ではE-mailサービスを実験的に開始したいと思います。情報やコメント等を募集します。尚、当方で加工、転載しますのでご承知ください。ご希望の方にmailで報告致します。

E-mail ID:NIFTY-serve PEG00236（福島）まで

## 大会実行委員大募集

来年5月23日（土）24日（日）の2日間、大阪教育大学柏原キャンパスにおいて日本環境教育学会第9回全国大会が開催されます。第2回（大阪）第5回（神戸）に続いて関西支部が大会の実行を担うわけですが、世話人以外のスタッフを広く大々的に募集したいと思います。

あわせて、今年11月22日（土）大阪教育大学天王寺キャンパスにおいて開催される関西支部第6回研究大会の実行委員の募集も受け付けます。

事務局（鈴木研、8頁に連絡先掲載）にご一報くださることを心よりお待ちしております。第1回実行委員会は8月30日（土）に予定しています。

### 関西ワークショップ等 今後の予定（決まっているイベントのみ）

9月27日（土）天理おやさと研究所見学と講演

10月25日（土）いきいき地球館（大阪市）見学とディスカッション

11月22日（土）日本環境教育学会 関西支部第6回研究大会



当初、予定されていた6月28日の世話人会が台風7号の接近で延期されたことに影響を受け、エコメール第39号の発行が予定より半月以上遅れました。ご了解ください。

## 関西ECOMAIL

第39号 1997年7月16日発行

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室)気付

〒582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1

(FAX) 0729-78-3381 [直通]

第40号は 1997年9月2日発行予定 原稿必着期限8月29日